早稲田建築ニュース

Waseda Architecture News of

91

July 2011

●発行者＝稲門建築会会長・中川武
●編集者＝稲門建築会広報委員会（委員長・宮川浩）
●発行所＝稲門建築会
〒169-8555　東京都新宿区大久保3-4-1
早稲田大学理工学術院 55-S-02-01
電話・ファックス＝03-3208-0640
ホームページ＝http://www.all-waseda.com/rikogakkai/toumon.arch/
電子メール＝toumonji@poppy.ocn.ne.jp
制作＝都市建築編集研究所
デザイン＝小貫功
©稲門建築会

●巻頭言－集まりさんじて……中川武
●日本芸術院賞を受賞して……古谷誠章
●東日本大震災調査復興本部立ち上げ……佐藤滋
●特集　東日本大震災
被災された方々に心よりお見舞い申し上げます
●東日本大震災を視察して……………村松映一
●特集・東日本大地震…………桂純二／豊川士朗／佐野穂高／田所真／久保洋香
●2010年度職域別会費納入率ベスト40発表
●新入生オリエンテーションに参加して…………伊藤由紀子／米澤貴紀
●2011年度「春の大会」報告
…………特別対談「音楽と建築」・第14回稲門建築会特別功労賞受賞者紹介

巻頭言

集まりさんじて
――稲門建築会会長就任にあたって――

中川武
［苗S42・院S44・博S61
早稲田大学教授／稲門建築会会長］

私は1963年学部入学で、65年秋の学費値上げ反対闘争から、70年安保闘争前後まで大学の授業はあまりありませんでした。紛争のためばかりでなく、普段から学生は大学にあまり行きませんでした。

今から思えば、何も無いことの過酷と自由があった戦後から、高度経済成長社会へと着々と進行していたのでしたが、社会にはまだ隙間があり、一般学生にもまだエリート意識があったように思います。非常時に日常からは想像することができないような驚くべき才能が突然出現することがありました。大学当局との団交やクラス討論の場において、当時の世界情勢の経済学的分析から闘争方針を提起する者や、大学ロックアウトのためのバリケードを机、イスを使って巧みに構築する者たち……。そんな時早稲田の建築科はやはりすごいナと妙に感心したことを思い出します。

「本当の困難の中で、無償の愛が生まれる」という言葉があります。未曾有の災厄である〈3・11〉の東日本大震災・大津波・原発壊滅が仮になかったとしても、日本も建築も危機に直面しつつありました。そのゆるやかな危機の進行の中で、新しい力の予兆もあったように思います。

明治開化以後の日本社会の近代化のために、東京帝国大学建築学科は基幹的な役割を果たしたと思います。一方で、建築を通じて探求すべき精神の自由や市井の人々の暮らしを支えるという理念は片隅に追いやられつつあったのです。その理想の火を絶やさぬためにコンドル―辰野金吾から志しを受け継いだのが早稲田建築学科創設者の佐藤功一でした。東大から内藤多仲が、芸大から今和次郎が、そして危機のたびに全国津々浦々から、馳せ参じてきた有志の面々によって早稲田建築の伝統は築かれてきました。

現在の稲門建築会の骨格は内藤多仲の号令によって生まれました。現在は大学そのものが希少ではなく、実業界にまで及ぼした内藤の力を望むべくもありません。しかし、近年多くの役員諸氏の無償の愛によって、稲門建築会は確実に早稲田建築のバックボーンを支えてきました。私もまたこの精神のリレーに参加して尽力したいと思います。

日本建築学会「東日本大震災調査復興支援本部」立ち上げ……佐藤滋

（早稲田大学教授／前・日本建築学会会長／苗S48・院S50・博S55）

3月11日の大地震の時、日本建築学会では理事会の真っ最中で、定款に「社会への貢献」という学会の行動目標を盛り込む説明をしているところでした。理事の多くはこの日、帰宅することができず、建築会館で夜を明かしました。テレビなどの情報で、容易ならぬ事態であることは想像がつきましたので、その日のうちに「調査復興支援本部」を立ち上げました。この間、目指したことは、

第1に、地域が専門家と連携し自らの力で立ち上がる復元力を育むまちづくりの流れをつくること、

第2に、学会が調査や提言だけでなく、復旧・復興に関しても一定の役割を担うこと、

第3に、このことを他の学会や職能組織との強力な連携により進めること、

の3点です。

第1の、復元力を育むまちづくりの流れに関しては、4月11～21日の期間、建築博物館で連続シンポジウムや「復興まちづくりデザイン提案」、パネル展示などによる「復興を見据えたまちづくり展」を開催しました。復興まちづくりのイメージを交換し、提示するなど、筋の通ったビジョンを示すことができたと思います。

また、第2、3の点は、もちろん学会が直接被災地を支援するのではなく、被災地に入って活動する専門家を支援するための情報、人材プラットフォームを他の職能団体などと連携して構築する方向で進めています。

復興まちづくりは息の長いプロセスで、様々な関係者、専門家が重層的、有機的な連携で被災地の支援を進めることになるでしょう。役割も様々です。このようなプロセスで、それぞれに地域で、共創の布陣を創り上げ、マネージメントすることが重要です。

阪神・淡路大震災以来、様々な震災復興に都市計画・まちづくり関係者は関わり、多くの経験を積んできました。なかでも稲門建築会の関係者はその中核で活躍しました。人的なネットワーク、積み上げた経験をもとに、復旧・復興まちづくりに貢献することができるものと確信しています。

東日本大震災を視察して……村松映一

（前・稲門建築会会長／苗S38）

5月21、22日、稲門建築会東北支部長である渡辺浩文・東北工業大学教授（尾島俊雄研究室出身）の案内で、東日本大震災仙台周辺の被災地を視察する機会をもつことができた。大木紀通事務局長（苗S42）、守山久子広報副委員長（苗S61）が同行しての取材であった。南の山元町から北の仙台港北へと仙台湾沿いに延びる仙台東部自動車道路、さらに北へ向かう三陸自動車道を経て、国道45号線に入り女川湾まで。2日間にわたり渡辺さんの車で被災地を巡った。

各地の主要道路は瓦礫、残骸が取り除かれ、仮舗装・仮整備の状況は逃れないが大型車の通行も可能であり、倒れた電柱の新設も徐々に進捗している。テレビ報道や紙上で紹介されているように壊滅的な被害を受けた建物・車等の瓦礫は、集積地に丘状に運び込まれている。しかし被災地域は膨大であり、とてつもない量の瓦礫がいつまでに除去されるのかは計り知れない。石巻港、女川港などの埠頭の地盤沈下、周辺大型施設の被害は大きく、瓦礫や残骸の除去も遅々として進むことなく異臭が漂う地域もあった。少数の自衛隊員以外、人の気配もなく、一体いつになったら本格的な復旧がなされるのか覚束ない状況である。

石巻市から女川町に至る牡鹿半島（女川原子力発電所のある半島）の根元にある渡波漁港から広がる内海では、牡蠣の卵（種ガキ）の養殖が被害を受けることもなく行われていた。静かな海面が広がり、一瞬の長閑さを覚えるが、女川街道を下り女川浜に向かうと突然景観は変わる。とてつもない津波の高さであったことが周辺施設の波の痕跡、高台にある住宅の被害状況から目視でき、言葉も出ない。瓦礫の処理が進む地域でも、鉄筋コンクリート造の躯体が残された学校の内部に車が折り重なるように入り込んでいる（3面写真参照）。流されてきた車がどうしてこのように入ったのかも理解できない惨状である。

写真右：杭がちぎれた状態でRC造の建物が横転（0521. 女川町）
写真左：右から村松前会長、渡辺東北支部長、大木事務局長（宮城県七里ケ浜町）

このような自然の力を人間の力で征服するなどと考えるのは愚かなことである。松島では松島港の入り口にある桂島などの諸島が津波の力を弱め、瑞巌寺などの被害が最小限に食い止められたという。津波の押し寄せた平地の住宅街も、小高い丘の裏側では建物の本体が一見修復可能な状況で残されている。仙台東部道路の海岸側と反対側では被害状況も異なっている。江戸時代に構築された貞山堀（河川沿いに松並木がある風光明媚な堀）は旧北上川から阿武隈川へと連なる運河であるが、堀の損傷も随所に見られるとはいえ津波に対してなんらかの効用があったのではないか。

復興に当たっては地域によって異なる被害の状況を的確に把握し、防波堤のみに依存しない自然の形状を生かした復興の在り方を模索しなければならない。地域の大学が中心となり、その調査・分析を速やかに実施することが肝要ではないか。義援金の使い方も、このことを念頭に考えてみる必要があるのではないだろうか。

日本芸術院賞を受賞して

古谷誠章（早稲田大学教授／苗S53・院S55・博S61）

思えば2001年1月に、市民に公開の会場で長野県茅野市の新しい市民館の設計者に選ばれて以来、5年の歳月をかけて熱心な市民の方々と協働によって館が完成し、さらにオープン後も年を追うごとに多くの来館者を迎えて、積極的に活用していただいています。建築は使われてこそ生命が吹き込まれるもの、設計に携わった建築家としてこれにまさる喜びはありません。それからちょうど10年のこの年に、この茅野市民館に対して日本芸術院賞という大変価値ある賞をいただいた幸福を、館に関わったすべての方々、設計や工事に協力してくれた方々、研究室や事務所の仲間たちと共に分かち合いたいと思います。

今井兼次先生、池原義郎先生、これまで稲門でこの賞を受賞された数々の先生方の末席に加えていただいたことは、私自身の思ってでも見なかった喜びであると同時に、改めてとても身の引き締まる思いでいます。また、私をこれまで育てていただいた恩師の穂積信夫先生をはじめとする稲門の多くの先生・先輩方にも、この場をお借りして心からお礼を申し上げたいと思います。市民館の設計そのものに対しては、構造設計の田中彌壽雄先生、ホールコンサルタントの伊東正示さん、市民による策定委員会を指導された倉田直道さん、公開プロポーザル審査員の佐藤滋先生、地元事務所との協働を取り持ってくださった宮本忠長先生等々、大変多くの稲門の諸先輩方にご尽力ご支援をいただきました。改めて感謝いたします。

こうして振り返ってみてつくづく思うのは、やっぱり早稲田で学んだことが大きく私自身を支えてくれたのだなと、改めて実感します。入学以来35年が経ちましたが、その間絶えず進取の精神を保ち、人々と共に建築を作り上げる姿勢をもつことが出来たのも、そのお陰だなと思います。特にこの10年間は、かつての同級生、同窓生たちと実社会で力を合わせて仕事をすることも多くなりました。こうした多様な面々を大変誇りに思いますし、そのシナジーの凄さにも大いに励まされ、助けられることしきりです。

実は受賞の内示は3月にいただいていたのですが、その直後にこの東日本大震災が起き、私もかつて穂積先生をお手伝いして設計した田野畑村のホールなどが避難所となったため、4月、5月と避難所生活の支援に出かけて参りました。目下は、村長の依頼で村の復興計画策定委員会に協力をしています。そんなこんなで、ここ何カ月か落ち着く暇がありませんでしたが、スタートの遅れた前期の授業も半ばを越えて、すこしずつ日常のテンポを取り戻しつつあります。

去る6月13日、日本芸術院にて授賞式も無事終了しました。これを大きな節目として、今後も引き続き研究室の学生諸君と共に、稲門の皆様とも力を合わせて、少しでも人々を幸福にする建築を生み出していきたいと思います。

次号92号（11月発行）は会費納入者にのみ、お届けいたします。2011年度会費納入がまだの方はお早めに!!

2011年度　春の大会
建築学科創設100周年を祝う会　稲門建築会記念総会
◆大隈講堂で開催◆

稲門建築会記念総会

6月1日（水）、大隈講堂で春の大会を開いた。建築学科創設100周年の節目を期し、「記念総会」と「建築学科創設100周年を祝う会」の2本立てという構成。祝う会では、さだまさし氏を招いての特別対談も行った。

例年より早い15時から始まった記念総会は、矢地宏一理事（苗S51・院S53）の司会で進行した。10年度で退任した村松映一・前会長（苗S38）が、100周年記念事業の報告と会員の支援に対する御礼、渡辺浩文・東北支部長の協力を得て5月21・22日に行った東北大震災被災地視察に関する報告などを中心に4年間の任期を振り返った。2010年度活動および収支決算の報告、2011年度の活動に関する活動計画と収支予算の提案を行い、異議なく承認。新役員の選任を実施した。

建築家の岡部憲明氏（苗S46）と作家の東秀紀氏（苗S48）、写真家の尾形一郎氏（苗S58）・優氏（苗S62）に第14回稲門建築会功労賞を授与。退任する理事や評議員を代表して村松前会長に、中川武新会長（苗S42・院S44・博S47）が記念品と感謝状を贈った。

「建築学科100周年を祝う会」の後、隣接する大隈ガーデンハウスに会場を移して懇親会に。さだ氏をはじめ、佐藤滋教授、古谷誠章教授、博士号を受位した宮津裕次氏（苗H17・院H19・博H22）、日本建築学会奨励賞を受賞した山崎義人氏（苗H7・院H9・博H16）など多彩な参加者がスピーチし、例年以上の盛会となった。松本哲弥氏（苗S61・院S63）の発声で校歌斉唱、村松前会長の一本締めで終了した。

建築学科創設100周年を祝う会　特別対談「音楽と建築」

見城美枝子氏（院H7）による司会の下、記念総会に引き続き大隈講堂で「100周年を祝う会」を開催した。挨拶では、稲門建築会新会長の中川氏、前会長の村松氏、橋本周司・早稲田大学副総長、建築家の内藤廣氏（苗S49・院S51）、古谷教授が登壇。東日本大震災を前に建築関係者の役割をどこに見いだすべきか、これからの新しい日本を構築していくことに建築の可能性がある、など問い掛けた。

特別対談「音楽と建築」では、シンガーソングライターで作家のさだまさし氏が建築家の古市徹雄氏（苗S48・院S50）と語り合った。両氏は、2003年に開館した「ナガサキピースミュージアム」の仕掛人と設計者として出会って以来、交流をもつという。くつろいだ雰囲気のなか、音楽と建築の類似性、演奏する空間としての建築についてなど、豊富なテーマに及んだ話で1時間半はあっという間に過ぎた。

印象的な言葉をいくつか。「悲しいとか切ないといった端的な言葉を使わず、風景や季節の描写を通して本当に伝えたいことを伝えていきたい」、「絶対音感が邪魔をして、グレープ時代は妥協するのが大変だった」というさだ氏の言葉に、思わず納得した聴講者も多かったのではないか。また「最近の建築は匂いがない」「全国で特徴をもったホテルが減ってきた」と指摘するさだ氏に対し、古市氏は「建築はもともと風土に合わせてつくられてきたが、機械化に伴い均質化した。その間、エネルギーの大量消費が行われてきた」と返答。中国の地下住居ヤオトンのような建築の在り方が今後見直されてくるのではないかと示唆した。

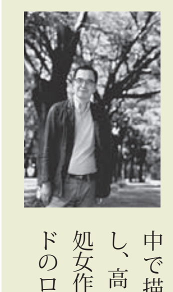
第14回稲門建築会特別功労賞

【受賞者紹介】（表彰理由より要約）

◆岡部憲明氏◆（苗S46）

大学卒業後、フランス政府給費研修生として渡仏し、レンゾ・ピアノ氏とともにフランスやイタリアで活躍。関西国際空港旅客ターミナルビル国際競技設計に優勝したのを期に帰国した。同ターミナルビルや牛深ハイヤ大橋、小田急新型ロマンスカーなど、幅広い分野で新たな技術とデザインを融合した作品をつくり続けている。稲門建築に対しては、レンゾ・ピアノ財団の招聘研修制度を紹介し、2000年より優秀な学生の研修実績に貢献している。

◆東秀紀氏◆（苗S48）



建築・都市を、近代文学の形成過程との交渉の中で描き出す著作を発表し、高い評価を受けている。処女作「漱石の倫敦、ハワードのロンドン」から「鹿鳴館の肖像」「ヒトラーの建築家」等を経て近著「東京の都市計画家　高山英華」まで、丹念な取材と緻密な思索に基づきながら、時代や人物をシャープに描き出して広い読者を獲得している。建築・都市と人間・市井をつなぐ優秀な著作は、「建築のこれから」に対しても貴重な示唆を提示している。

◆尾形一郎氏・優氏◆（苗S58／苗S62）

1990年代から今日まで、大地や民族、文化、風土に依拠して、そこから生まれた都市や建築、芸術や表現を追い求めてきた写真家。世界が近代化される過程で、さまざまな地域の土着的なものや命観あるものが擦過されてきた中、そうした流れに迎合せず、世界各地の歴史的に根づいた現象、建築や風土、それらを包み込む総合的な世界を写真記録として残してきた。早稲田建築という場所でつかみ取ったものを、写真表現によって世界に発信し続けてきた。

早稲田建築合同クラス会 2011
11月6日開催!!

11月6日（日）に本年度の早稲田建築合同クラス会を実施いたします。本年度は「情報交歓」をテーマとし、情報の発信と交流について考える場を提供したいと考えております。

稲門建築会会員相互の公私にわたる交流や情報交換を深めていくことで会員個人の活躍や連携の場も増やしたいと思いますが、そのきっかけとなる「場」がなかなかできません。そこで、私たち実行委員会（苗S60）では、お互いに交流できる場の一例を試作して、これを皆さんにご提案しようと考えました。例えば会員の近況やコンテンツを発信する場をウェブサイトに設けたり、合同クラス会当日には遠方の会員とのインターネット経由によるコミュニケーションの場を実験的につくってみるという企画を考えています。

この合同クラス会という限られた時間内の小さな情報の発信と交流の場が、少しずつ仲間を集め、あるいは外にも開かれて、会員相互の交流が活性化するためのきっかけとなれば幸いです。

その他の内容については早稲田建築合同クラス会2011ホームページ（URL: http://waseda-kgc.com）をご覧ください。後日、チケットの前売り等ご案内させていただきます。どうぞお楽しみに。詳細は、同梱のチラシをご参照ください。

高橋英治（合同クラス会実行委員長／苗S60）

2010年度　決算報告書
自　2010年4月1日
至　2011年3月31日

貸借対照表
2011年3月31日現在

資産の部　科目	金額	負債・積立金の部　科目	金額
現金	185,421	未払金	3,466,859
振替預金	4,023,312	預り金	180,000
普通預金	9,997,917	前受金	2,255,000
定期預金	27,848,055	事務費準備金	795,000
未収金	1,162,900	積立金	26,000,000
立替金	47,987	特別積立金	7,504,315
仮払金	0	（合同クラス会運営基金積立金	6,146,260 円）
		（60周年準備積立金	1,358,055 円）
生協出資金	15,000	決算収支差額	3,079,418
合計	43,280,592	合計	43,280,592

単位：円

収支計算書
●収入の部

勘定科目	年予算	実績金額	予算実績差額
【会費及び入会金】			
年会費（正）	11,700,000	12,005,000	305,000
年会費（協）	0	0	0
学生会費	2,150,000	2,195,000	45,000
入会金（協）	0	0	0
【維持費】			
維持費	3,450,000	3,820,000	370,000
【寄付金】			
寄付金	0	5,000	5,000
【活動に伴う収入】			
広告収入	1,030,000	1,068,400	38,400
名簿収入	0	0	0
その他活動収入	1,350,000	1,347,000	△3,000
【資産から生じる収入】			
受取利息	100,000	58,474	△41,526
【その他収入】			
雑収入	0	16,112	16,112
【前年度繰越金】			
前年度繰越金	1,617,904	1,617,904	0
収入合計	21,397,904	22,132,890	734,986

単位：円

●支出の部

	勘定科目	年予算	実績金額	予算実績差額
活動費	【会員】	1,395,000	1,058,662	336,338
	会員会議費	345,000	287,678	57,322
	名簿整備費	400,000	235,259	164,741
	OBによる仕事紹介	640,000	535,725	104,275
	熱湯夜話	10,000	0	10,000
	【広報】	4,800,000	4,988,673	△188,673
	早稲田建築ニュース発行費	2,960,000	3,235,321	△275,321
	イヤーブック発行費	1,770,000	1,709,252	60,748
	概要書発行費	10,000	0	10,000
	ホームページ・メルマガ運営費	60,000	44,100	15,900
	【事業】	700,000	516,592	183,408
	見学会・セミナー開催費	180,000	78,272	101,728
	図面ライブラリー	500,000	438,320	61,680
	活動支援費	20,000	0	20,000
	【総務】	2,650,000	2,436,998	213,002
	総会会議費	650,000	524,517	125,483
	補助金：支部	800,000	800,000	0
	〃　：学生	900,000	850,000	50,000
	稲門建築会賞	30,000	28,350	1,650
	顕彰制度運用費	120,000	131,061	△11,061
	日本建築学会選挙	100,000	100,910	△910
	口座振替システム運用費	50,000	2,160	47,840
	【活動運営費】	1,820,000	1,373,818	446,182
	会議費	140,000	90,400	49,600
	旅費交通費	600,000	300,320	299,680
	印刷費	600,000	528,451	71,549
	支払手数料	280,000	254,647	25,353
	60周年準備金費用	200,000	200,000	0
	活動費計	11,365,000	10,374,743	990,257
運営費	事務費	7,500,000	7,418,584	81,416
	PC環境整備費	150,000	152,317	△2,317
	用品費	90,000	39,548	50,452
	通信費	140,000	106,671	33,329
	交通費	600,000	635,310	△35,310
	印刷費	40,000	195,627	△155,627
	支払手数料	20,000	11,500	8,500
	慶弔費	40,000	3,255	36,745
	雑費	40,000	10,917	29,083
	事務費準備金費用	105,000	105,000	0
	運営費計	8,725,000	8,678,729	46,271
予備費計		1,307,904	0	1,307,904
支出合計		21,397,904	19,053,472	2,344,432
決算収支差額		――	3,079,418	――

単位：円

決算処分案

決算収支差額		3,079,418 円
処分額		100,000 円
（OA機器更新準備金	100,000 円）	
次年度繰越金		2,979,418 円

2011年度　理事会役員一覧（＊は新任）

会長　中川　武（苗S42）早稲田大学＊
副会長　杉谷文彦（苗S55）㈱梓設計
副会長　浜田明彦（苗S50）㈱日建設計
副会長　西谷　章（苗S48）早稲田大学＊
副会長　小林照雄（苗S47）㈱大林組＊

○総務委員会……
委員長　矢地宏一（苗S51）鹿島建設㈱
副委員長　伊藤由紀子（苗S56）㈱竹中工務店
副委員長　竹内英健（苗S49）㈱熊谷組
熊谷広基（友S31）㈲熊谷一級建築士事務所
樫村弘子（芽S57）スカイコート賃貸センター㈱
金子寛明（苗S58）新菱冷熱工業㈱
棚沢一浩（苗S61）㈱ザイマックス不動産マーケティング研究所
中嶋康雄（苗H3）ラサールインベストメントマネージメント㈱
柴田淳一郎（苗S56）㈱大林組＊

○会員委員会……
委員長　鈴木康史（苗S59）東京建物㈱
副委員長　見城辰哉（苗S53）清水建設㈱
副委員長　鰺坂　徹（苗S56）㈱三菱地所設計
井田敏明（苗S58）東京電力㈱
那須　浩（苗S63）㈱梓設計
田中　茂（芽H15）㈱スリーディーイノベーションズ
溝部礼士（芽H19）一級建築士事務所SUEP
山本想太郎（苗H1）山本想太郎設計アトリエ＊
柳井　崇（苗S59）㈱日本設計＊
筬島　亮（苗S57）㈱山下設計＊
加藤陽一郎（苗S55）大成建設㈱＊
森　勇司（修士2年）田辺研
吉村真一（修士2年）田辺研＊

○事業委員会……
委員長　田名網雅人（苗S55）鹿島建設㈱
副委員長　山崎隆盛（苗S56）㈱日建設計
副委員長　菅　順二（苗S54）㈱竹中工務店
大野　勝（苗S48）㈱佐藤総合計画
髙口洋人（苗H7）早稲田大学
星野修一（苗S49）㈱星野建築構造設計事務所
古市徹雄（苗S48）㈱古市徹雄都市建築研究所
松本哲弥（苗S61）大成建設㈱＊
前田幸矢（芽H21）㈲福本建築設計事務所＊
田所　真（修士2年）古谷研
倉持拓也（修士1年）髙口研

○広報委員会……
委員長　宮川　浩（苗S56）㈱日建設計
副委員長　田邉新一（苗S57）早稲田大学
副委員長　守山久子（苗S61）フリーランスライター
小笠原昌宏（苗S57）㈱日本設計
石黒唯嗣（芽H14）山芳建設㈱
豊川士朗（苗S59）中野区
川村聡宏（修士2年）田辺研
長　侑希（修士1年）古谷研＊

○事務局長……
大木紀通（苗S42）稲門建築会

○監事……
清水和彦（苗S53）三機工業㈱＊
樋口正一郎（苗S55）戸田建設㈱＊

○幹事……
内木博喜（芽S60）早稲田大学芸術学校
金　炫兌（博H22）早稲田大学
山田俊亮（苗H19）早稲田大学＊

○早稲田建築合同クラス会実行委員会……
委員長　高橋英治（苗S60）千代田化工建設㈱＊

●主な会務の報告……

2011年3月以降の主な会務を報告します

◎会議……
・第5回理事会・第3回評議員会…4月20日
・11年度春の大会（記念総会・100周年を祝う会・特別対談・懇親会）…6月1日
・11年度第1回理事会・第1回評議員会…6月24日
・11年度支部長会…7月8日

◎活動……
・メールマガジンの発行：5、6、7月号
・イヤーブック「WA2011」の発行…3月25日
・学部・大学院卒業パーティー（稲門建築会賞授与）…3月26日
・建築学科新入生ガイダンス（会長挨拶）…4月27日
・新入生オリエンテーション（伊藤総務副委員長参加）…5月28日

訃報

下記の方々が亡くなられた旨、事務局にお知らせいただきました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

村上博智（苗S19）H23.4.24	結城高行（友S17）H17
岩田　巖（苗S23）	遠藤陳平（友S19）H23.4.27
岸川寛治（苗S30）H19.12.18	小島富次（友S26）H22.12.22
山崎　弘（苗S30）H22.9.13	田中房年（友S31）H18.12
若月啓功（苗S34）H22.10.26	柳沼勝吉（友S34）H22
小柳米之（苗S37）H19	佐藤健児（友S39）H22.11.4
豊嶋祐昌（苗S40）H22.12.13	阿部耕治（友S53）H22.12.26
古谷紀男（苗S40）	佐藤　貢（工S7）
末木恒美（苗S41）H22.7.30	安藤昭蔵（工S23）H23.2.21
三原勲夫（苗S43）	岡多摩雄（工S23）H22.9.14
春日泰男（苗S44）H20	山田浩一（工S26）H22.9.22
金子　正（苗S44）H22.7.10	瀬古道弘（甍S16）H21.2.16
中嶋孝夫（苗S48）H23.5.16	川上猪四郎（甍S18）H23.1.24
牟禮達意（苗H03）H23.5.8	原口元重（甍S18）
木村昭也（苗S28）H22.10.30	松田喜行（甍S18）H16.11.18
井戸昌平（苗S34）H22.12.30	神田正男（甍S19）H22.12.24
富田高行（苗S34）H22.12.8	小田武造（甍S22）H22.6.5
桑原豊吉（友S9）	小池正行（甍S23）H23.1.4
田崎公三（友S9）H23.1.6	井本達也（甍S24）H23.4.11
望月栄一（友S11）H23.5.13	
松田政治（友S15）H9.1.6	（2011.4.4～6.6受付分）

●事務局便り……

6月1日の稲門建築会総会で村松前会長から中川新会長へとバトンが渡り、新たな出発となります。村松前会長は最後の2年間を建築学科創設100周年記念事業の遂行に注力し、その成果が6月1日の「祝う会」に結実したと思っています。

100周年事業の裏話を少し紹介しましょう。私が事務局長になったのが、村松会長2年目の初めです。当時会長は会長職を1期2年で退任するつもりでおりましたので、100周年に何か記念事業をやりたいとの気持ちを持ちながらも、あまり積極的ではありませんでした。「合同クラス会」や「講演会」に「100周年」の冠を被せる程度の行事で済まそう、との話をされていましたので、私も気楽に構えていたのですが、2期目の会長職も続けなければならない雰囲気になってから、方向転換をされたようです。理事会の中に100周年の「準備委員会」を立ち上げ、教室にも協力願うよう「準備委員会」に指示を出すと同時に、自らも先生方に働きかけました。教室はこれを受けて、中谷先生を指名しました。翌年4月上旬大隈講堂で新入生ガイダンスがあり、ここで村松会長が挨拶をするのですが、その開会前に40分ほどの時間を割いて中谷先生が記念冊子とオーラルアーカイブの企画案を村松会長に口頭で提示したのです。私も同席していて、オーラルアーカイブの実現性に不安を感じましたが、会長はこの二つの提案にその場で同意されました。ここが記念事業の具体的なスタートです。会長の果敢な決断力に今更ながら感服しています。

ご自身の会社を立ち上げ、村松会長から村松さんとなられますが、今後もお元気な活躍を期待しております。

大木紀通（事務局長／苗S42）

●編集後記……

震災発生から4カ月が過ぎましたが、いまだ先の見えない状況が続いております。本号では、この未曾有の災害に対して様々な形で取り組まれている数多くの稲門関係者の姿を特集としてお伝えします。

早稲田建築ニュースでは、今後も震災対応関連のテーマをお伝えする予定です。

宮川浩（広報委員長／苗S56・院S58）

特集 東日本大震災

3月11日の東日本大震災では、稲門建築会員も被害を受けた。

東北支部によると、津波被害の恐れのある東北3県の沿岸地域と福島県内の原発避難指定区域（および30km圏内）に住所登録する会員は計6人。このうち4月18日現在で避難生活を送っていた会員は2人、無事を確認できた会員が1人だった。以前から連絡の取れない会員もいるため、それ以上は情報収集できない状況という。「多くの被災地では本格的な瓦礫撤去がこれからで、建築関係者が力を発揮する場面にはまだ至っていない。いずれ稲門建築会会員が東北の復興に手を貸してくださる機会が訪れた時は、ぜひ良い建築をつくってください」と渡辺浩文・東北支部長は語る。

5月下旬には村松映一・前会長ら稲門建築会一行が渡辺支部長を訪ね、被災地の状況を案内していただいた。（1面記事参照）今号では今回の大震災に様々な立場で関わった稲門の活動をお伝えする。

東日本大震災、2カ月半を振り返って

桂 純二［大成建設東北支店長／苗S48・院S50］

頻発する余震のせいで、震災直後の1次復旧体制から平常時体制に戻るまでにかなりの日時が経過し、当社は5月末にやっと災害対策本部を閉鎖することとなった。

とはいえ、被災地の復旧・復興に目処が付いたわけではなく、方針が定まらぬまま積み残し状態というのが実情である。

震災直後、われわれ中央ゼネコンは緊急の出動要請に応えるべく、人員はもちろん、仮設資機材から重機・運搬車両、燃料・医薬品・食材に至るまで、いわゆる兵站整備に努め、臨戦態勢を整えてきた。然るにこの間に手掛けた仕事はといえば、個別顧客に対する既存復旧工事が大半であり、地域再生に至る復興工事に関してはまったく手付かずの状態で、瓦礫の撤去さえ、その見通しも立っていないのが現状である。

因みに災害廃棄物は一般廃棄物として処理することとなっており、環境省所管ではあるが被災市町村管轄で地元企業へ発注される仕事と位置付けられている。既存の法令・行政の枠組みや諸々の制度・慣習に囚われず、速やかなる対応をお願いしたいものである。

今回の一連の災害は、天災としての地震に始まり、数多くの人災（津波、原発、風評）を誘発してきたといわれている。三陸津波やスマトラ沖地震の経験からすれば、今回の津波を天災として捨て置くのではなく、想定すべき自然災害（人災）と位置付け、地域特性を踏まえた東北再生の礎として、その教訓を生かしたいものである。

仙台新港から石巻・気仙沼・釜石・宮古と北上する三陸海岸と、小名浜まで南下する比較的平坦な平野部とはまったく異なった光景が展開しているが、いずれにしても数百キロにわたって繰り広げられる惨状は、涙無くして見ることができない。大自然の脅威とそれを前にした人間の無力さを感じる。興味本位ではなく是非一度自分の目で確認していただきたい。

何から手をつけていいのかわからないけれど、一つ一つやれることをやっていくしかないのだと思う。少なくともこの文章が活字になる頃には、東北復興の兆しが見えていることを切に願っている。

自治体による被災地支援について

豊川士朗［中野区役所／苗S59］

今回の震災直後から、自治体独自の判断により、被災地の自治体を直接支援をする動きが広まった。過去の災害においては、被災地域のある県と支援する都道府県との間で調整を行った後、各自治体に支援を割り振る流れが多かった。しかし、今回は、被災地域があまりに広く、東北地方の各県自身が被災団体となり、調整機能が十分に働かないことから、直接支援が広まったものと思われる。被災時の相互支援を想定した協定をあらかじめ結んでいた自治体以外にも、自治体首長が直接、被災地を訪問し、現地自治体の状況を把握した上で支援を決定する事例もある。

私が勤務する東京都中野区も、このような動きのある自治体の一つである。東京都からの派遣要請に応じている一方で、独自の取組として、宮城県の東松島市、岩沼市及び亘理町に職員を派遣して、業務支援に取り組んでいる。派遣する職員は事務職や福祉職が多いが、ここでは建築技術職の派遣状況を中心に紹介する。

従事している職務内容は、津波浸水地域と、非浸水地域で大きく異なっている。

津波浸水地域では、膨大な瓦礫の除去が喫緊の課題である。専門業者に業務を委託し、その作業指揮監督が業務の中心となるが、これから気温の高い時期になると、ごみの腐敗や粉じんの発生なども相まって、作業環境は非常に劣悪である。

浸水地域では住宅は概ね全壊または消失であり、土地利用の基本的な方針決定の見通しが立たないため、住宅の再建は全く手つかずの状態である。しかし、今後方針が定められた段階では、膨大な数の住宅の再建が一気に進む可能性もあり、行政としても対応が必要となってくる。

非浸水地域については、地震により損壊した住宅の修復支援が職務の中心となる。住宅の被害調査・被災認定を実施し、状況に応じて補助金を交付し、修復を促進しようとするものである。不足する仮設住宅の代替の意味合いもある。一方、公共施設の修復はまだまだで、住宅への対応が一段落したところで、本格的になるものと思われる。

被災地自治体では、これまでの職員数の削減の影響で、今回の大震災のような緊急対応が困難になっているとの指摘もある。被災地自治体の機能不全状況はしばらく継続すると思われ、市町村の再編も可能性として出てきている。一方、政府は津波浸水地域について、あまりにも広域に亘るため、復興の基本的な方針を決めあぐねている。政府の方針決定を待つまでもなく、自治体がまちづくりにイニシアチブをとることが必要となっており、全国からの強力な支援が不可欠である。今後の被災地支援にはわれわれ建築人が大いに期待されていることを肝に銘じるべきであろう。

遺品保管所（亘理町）

土葬仮埋葬場（東松島市）

5月末の降雨による浸水（東松島市）　写真提供：豊川士朗

岩手県田野畑村・避難所での生活改善支援活動を通じて

佐野穂高［修士2年／古谷研］

岩手県田野畑村は古谷誠章教授の師である穂積信夫名誉教授が以前数件の建築を設計され、所縁ある場所であることから本支援活動が発足しました。私は古谷研の代表として4月と5月にそれぞれ3日間、現地に滞在、被災地の視察及び避難所となっている穂積先生の作品の「アズビィホール（田野畑村緑地等管理中央センター）」での生活改善活動を行いました。被災者の助けをしたい気持ちはもちろんのこと、建築を学ぶ学生として、地震のリアルな様子を少しでも体感しておきたいという思いが強くあったからです。

第1回目は穂積先生、穂積研OBの先輩方、古谷教授および古谷研の学生、2回目は家具デザイナーの藤江和子さんとテキスタイルコーディネーターの安東陽子さんも同行して下さり、各々の専門分野を掛け合わせた活動を行いました。

訪れる前は様子がわからず不安でしたが、被災後すぐにほぼすべてのインフラが回復したこともあってか、150名ほどが生活している避難所の雰囲気は落ち着いており、少し安心しました。物資はむしろ山積みになって余っており、困窮した地域とのギャップに衝撃を受け、考えさせられる光景でした。

具体的な活動としては、段ボールと布によるパーティションを使った更衣室や試着室、布の間仕切り、箱の段ボールを積んだ収納家具、段ボールのローテーブル、屋外での会議や談話用の木のロングテーブルを作成しました。最低限の生活は確保された避難所において、生活を少し豊かにするものとして構想していきました。実際に現地でコミュニケーションをとりながら、用途や大きさや等の個々のニーズに合わせて変化を加えながら作っていきました。避難所というすべてを提供される一方の環境において、主体的に自分の欲しいものを選ぶ形で提供出来たことが喜んでいただけたポイントであったと感じています。

生活支援が一段落した現在は村全体の復興計画構想に取り組んでおり、今後も積極的に関わっていきたいと思います。

アズビィホール（穂積信夫先生設計）で段ボールと布によるパーティションや収納家具、ローテーブルを作成した
写真提供：佐野穂高

復興に向けたリーダーの存在 ―NGOサポートメンバーを体験して

田所 真［修士2年／古谷研／苗H22／事業委員会学生理事］

震災から1カ月が経とうとする4月8日、NGO団体のサポートメンバーとして、2日間、仙台市を訪れた。県外ボランティアを被災地のボランティアセンターに派遣するための手配と、彼らの宿泊ベースの開拓が目的であった。

東北地方にあるカトリック教会の施設などを中心に宿泊場所となる場所を探した。そこで心に残ったことは、被災者と県外ボランティアとのトラブルなどを警戒して提供を断られたケースであった。当然受け入れてもらえると思っていたのだが、被災者が普段利用している施設に県外からボランティアが押し寄せるのだから、そこに摩擦が生じるのは当然である。しかし、それを両者で話し合って解消させますというのは難しい話で、ちょっとした不満でも素直に口に出せないのである。そういった時には、それぞれに仲介する代表者が必要で、その間で話し合うことが必要だと改めて感じた。

これからの復興において立場の異なる人々との関係におけるリーダーの必要性を再認識したと同時に、建築家もそういった存在なのだと確信した。

津波の力、自分の力、つながる人の力 ―「大学生泥かきボランティア隊」に参加して

久保洋香［修士1年／田辺研］

僕は4月29日～5月3日の5日間、日本財団の「大学生泥かきボランティア隊」に参加し、宮城県石巻市に行ってきました。

今回は牡鹿半島にある漁港で、「瓦礫」の中より牡蠣養殖用のブイ、穴子捕獲用の筒、網などの回収を行いました。家にトラックが突き刺さっている光景、鉄筋のビルが真横に倒れている様子は本当に衝撃的でした。しかし、目に入ってくる光景は「瓦礫」でも「廃墟」でもなく、被災された方々にとっては大切な「財産」であり「故郷」であったということを改めて認識しました。漠然と何かをしたい、自分の目で日本の今を見たいと考えていたのですが、作業を通して率直に復興のお手伝いをしたいと強く思いました。

ボランティア活動を通して、津波の力、自分一人のちっぽけな力を痛感しましたが、人がつながったときの力の凄さも感じました。ボランティアや支援は一過性のものではなく、息の長いものにしなくてはならない。地震を体験した世代、そして数十年後この国を支える僕らの世代が発信して、行動していきたい。これからも僕は同じ日本人としてこの国の復興を手伝っていきたいと思います。

最後の夜、同じ班の仲間10人と最後のミーティング。5年後の自分に向けてそれぞれ手紙を書きました。震災で感じたこと、東北の将来のこと、日本の将来のことなど。そして、一緒にボランティアをした仲間と約束しました。いつかこの土地に帰って来て、旅館に泊まって美味しい牡蠣と穴子をたらふく食べようと。その時、持ち帰った手紙を持ち寄って酒の肴にしてみんなで石巻で語り合おうと。

0429－0503. 大学生泥かきボランティア隊（石巻市）
写真提供：久保洋香

2010年度 卒業生・修了生の第一歩

東日本大震災のあと、いろいろなイベントの自粛ムードが流れていた。そんな中、僕たちの卒業式も中止が決まり、「僕らの代は一年生の時にも麻疹が流行して新入生オリエンテーションが中止になってしまったし、ついてないな」と内心落ち込んでいた矢先に……、卒業式は行わないけれど、卒業パーティーは行うと告知された。「震災の後だからこそ、卒業生に一同に集い、社会にメッセージを送るべき」という教授会の意向があったらしい。結果からいうと、卒業パーティーを行うことができてとても良かった。同期や一緒に卒業する修士2年の先輩方と、今までの思い出や、これからの目的を語り合い、意識を共有することができた。精神的なショックから、震災を乗り越える一歩へ必ずつながったと思う。さらに、パーティーを節約することで約70万円が余ったらしい。このお金は稲門建築会に委託され、被災地支援に使われる。被災地の一刻も早い復興を願っている。

長侑希（修士1年／苗H23／広報委員会）

3月26日、卒業パーティにて、仲間たちと

被災地支援金、お預かりしました

稲門建築会会員から東北大震災被災地支援金をお寄せいただきました。現在、その活用法を検討中です。決まり次第、随時ご報告させていただきます。ご協力いただいた皆様、どうもありがとうございました。

6月15日現在、お預かりしている支援金は下記のとおりです。

①早稲田大学建築学科2010年度卒業生・修了生「卒業パーティー」より（70万円、事務局預かり）
②韓国稲門建築会の皆様より（40万円、佐藤滋教授預り）

0321. 女川地区　写真提供：桂純二

0326. 気仙沼地区　写真提供：桂純二

0521. 仙台市荒浜小学校　撮影／守山久子

2011年度 新入生オリエンテーション報告

◉軽井沢追分セミナーハウスで開催されたオリエンテーションに参加しました。遥か昔、自分の新入生の時にもオリエンテーションがあったのですが、当時女子校から男子大学に入学してしまった私は、むくつけき男子学生とバスに乗って一泊などとんでもないことと思い、サボったと記憶しています。

そんな時代は隔世の感あり、参加してみれば生きの良い女子学生たちが3分の1くらいを占め、雨のそぼ降る中、ハウスの間を元気に駆け回っていました。夕食を前にしてお腹を空かせた新入生たちに、中川武教授に続いて稲門建築会を紹介する段になり、会員数1万3,000人を超える100年続いている建築学科のOB会であること、数字をまとめると大きく見えるが、一人一人が集まり、1年1年を重ねて初めて存在し得る歴史であること、をお話させて戴きました。卒業の暁には会費納入をお忘れなきようお願いして手短に話を終らせたところ、中川教授から、稲門建築会にはオリエンテーションにも多額の後援をいただいている、と補足をしていただいてしまいました。

いつまでたっても先生にフォローしていただく、元学生でした。

伊藤由紀子（総務委員会副委員長／苗S56）

◉本年度の新入生オリエンテーションは5月28、29日に学部生170名、教員26名、修士課程学生のTA20名が参加して、軽井沢セミナーハウスにて行われました。中心となる活動は班に分かれて模型とプレゼンテーションボードを作成するワークショップです。今回の課題は「段ボールのすまい」で、段ボールを実際の素材として班員全員が住むすまいを、設置期間・状況も含めて考えるものでした。

現地に着き、昼食、課題説明の後、早速作業に取りかかりました。夕方には一時手を休めて立食パーティーが行われ、稲門建築会の伊藤様にもご出席いただき、同級生・先輩・先生方と有意義な交流の場を持てました。食後は作業に戻り、熱心なTAの協力のもと、夜を徹して作品製作の共同作業に取り組みました。完成した作品はいずれも段ボールの特徴を上手く使い、短所についても考えられたもので、講評会では先生方から多くのご意見・感想を頂きました。このオリエンテーションでの得難い経験をこれからの学びに活かして欲しいと思います。

米澤貴紀（早稲田大学理工学術院助手／苗H14・院H16）

上：全員集合して記念撮影／中左・下：初めての共同作業と講評会の様子／中右：稲門建築会を代表して伊藤由紀子氏が歓迎の挨拶

2010年度職域別会費納入率ベスト40発表

稲門建築会では2006年度から組織強化を図り登録職域企業を拡大し、現在93の企業が職域登録をしています。また、各企業の職域幹事の皆様にはお忙しい中会費納入率促進をはじめ、会と職域の橋渡し役を務めていただき誠にありがとうございます。

さて、昨年11月のニュース88号では2010年度中間全職域会費納入率ランキングベスト40をご紹介しましたが、このたび2010年度のデータがまとまりましたので発表いたします（2011年3月末）。

昨年度の会費納入口数は、職域幹事の皆様や各企業のOB、並びにすべての稲門OBの皆様のご協力により会費納入口数2,401口で、前年実績2,340口をわずかながら超える結果となり、ここ数年の下落基調を反転させることができました。しかし、目標として掲げる2,500口には、依然として届かない結果となっています。学科創設100周年、稲門建築会創設60周年を迎え、より一層団結を高め充実した会の運営を図るために会費収入は欠かせないものであります。2011年度の更なる会費納入率アップのため、改めてご協力をお願いいたします。　鈴木康史（苗S59／理事・会員委員長）

2010年度職域別会費納入率ベスト40

1	新菱冷熱工業㈱	100.0%	21	㈱梓設計	46.7%
1	㈱類設計室	100.0%	22	早稲田大学	46.5%
3	東海旅客鉄道㈱	87.5%	23	関東学院大学	44.4%
4	日本土地建物㈱	80.0%	24	東京電力㈱	43.2%
5	㈱都市デザイン	75.0%	25	新日鉄エンジニアリング㈱	42.9%
6	工学院大学	71.4%	26	㈱久米設計	40.9%
7	高砂熱学工業㈱	66.7%	27	㈱石本建築事務所	40.0%
7	㈱松田平田設計	66.7%	27	佐藤工業㈱	40.0%
9	東日本旅客鉄道㈱	64.7%	29	東京急行電鉄㈱	38.5%
10	㈱安井建築設計事務所	55.6%	30	安藤建設㈱	37.5%
11	㈱佐藤総合計画	53.3%	30	㈱入江三宅設計事務所	37.5%
12	㈱観光企画設計社	50.0%	32	㈱日建設計	37.1%
12	国士舘大学	50.0%	33	㈱ NTT ファシリティーズ	35.1%
12	ザイマックスグループ	50.0%	34	㈱東急設計コンサルタント	33.3%
12	芝浦工業大学	50.0%	34	㈱日建ハウジングシステム	33.3%
12	西日本旅客鉄道㈱	50.0%	34	前田建設工業㈱	33.3%
12	西松建設㈱	50.0%	34	三菱地所㈱	33.3%
18	戸田建設㈱	49.0%	38	清水建設㈱	31.9%
19	㈱三菱地所設計	48.4%	39	西武建設㈱	30.8%
20	大成建設㈱	47.5%	40	東海大学	30.0%

訂正

本年3月発行の建築学科100周年記念誌の「会員・受賞者一覧」ページに、次の方々を追加し、訂正いたします。

◎日本建築学会賞……
・1996年（業績）西川創（連名）「おはらい町の町並み保存再生」
・1998年（論文）真下和彦「鉄筋コンクリートシェルの耐力に関する一連の研究」
・1998年（論文）門内輝行（推薦会員）「町並みの景観に関する記号学的研究」
・1999年（論文）宇田川光弘「太陽エネルギーの建築的利用に関する環境工学的研究」

◎村野藤吾賞……
・1997年　早川邦彦「パーク・コート杉並宮前」

2010年度 会費・維持費納入者

年会費に加え、維持費納入にもご協力を賜りました。

●10口　斎藤清助

●5口　穂積信夫

●4口　笠原昌夫　桃田実

●3口　石井泉二郎　上野毅　宇津野和俊　衛藤文人　斎藤忠男　佐藤嘉剛　首藤治久　杉谷文彦　高遠広司　高原康樹　土田充義　袴塚登美男　橋本侑　村瀬正彦　山崎一彦　横川二郎

●2口　池田弘　池原義郎　磯部雅男　板谷敏正　岩田巖　卯月盛夫　遠藤和男　太田啓介　岡澤昭治　岡本宏　奥平与人　小倉要　形見スズム　蟹江淳　神山幸弘　河合弘　川角喜一　川股博海　木村建一　小畑晴治　近藤正一　佐々木群　佐藤光宏　柴田いづみ　柴田寛二　柴田知彦　須和田利男　大宮司禮子　高田十治　田中彌壽雄　田中義吉　富田三千三　富塚兆弥　長澤護　中島昌信　長沼洋一　中野直善　野口熙　浜野四郎　林欣彌　福島勲　古市徹雄　前田實　増田正　松岡泰史　宮城昌弘　室伏博　安恒忠男

●1口　青木明彦　青木慶次　青木治敏　青柳隆之　青柳幸人　秋山寿郎　阿久津壽　朝倉守美　浅原和美　朝日貞明（崔）　芦川進　芦沢勝利　足立暎一郎　阿比留勝利　阿部勤　阿部康人　新井精一　荒城昭和　荒能孝司　新谷眞人　有馬敏郎　有馬洋三　安藤紀雄　安藤治彦　飯田郷介　伊香賀俊治　池田賢　池田順子　池谷利一
井坂宏　伊沢久　石井健一　石岡俊二　石川慶二　石川巧　石川琢也　石川廣三　石川洋美　石川二巳穂　石川晶一　石田綽男　石堂威　石山修武　泉修三　井関健　磯崎亮　板場三四　板橋久雄　板谷薫　市川徹　市川秀紀　市瀬東一　市村茂次　井手洋一　伊藤滋　伊藤修二　伊藤誠一　伊藤得平　伊藤弘明　伊東賢伸　伊藤由佳　伊藤力雄　糸曽憲治　稲葉鶴松　井上波彦　猪岡達夫　井深誠　今井一郎　入江通雄　岩井一三　岩城好宏　岩佐達雄　岩田誠二　植田孝二　上原昭彦　上原力　植松佑昌　笛吹清志　内田芳照　内山誠人　梅崎菊代　梅主洋一郎　梅野岳　梅村旃二　江頭正和　榎本勇　海老根哲郎　遠藤慎治　遠藤精一　大川昭　大木紀通　大沢幸雄　大澤義行　太田隆信　大竹秀興　大谷祥一　大塚繁充　大塚唯雄　大西敏夫　大野晴偉　大之木晴樹　大平嘉行　大宮由起夫　大村進　岡建雄　小笠原昌宏　岡田隆行　尾形達夫　岡田孝生　岡部成　岡部憲明　岡村新司　岡本茂　岡本英徳　小川晃　小川重夫　小川誠一　尾木和成　沖田幸作　小口栄一　奥村晶彦　小倉茂樹　小倉正志　小倉優　納新二　押川直治　尾島俊雄　小田和正　落合千秋　落合弘文　小幡学　小櫃榮一　鏡太紀　笠井香澄　笠原真紀子　鹿島裕一　柏裕之
梶原稔　片岡省三　片山篤　勝又正昭　桂純二　加藤隆之　加藤達夫　加藤光一　加藤久郎　加藤宏生　加藤正樹　加藤正之　加藤泰　金井俊夫　金榮素夫　金岡伸幸　金澤圭竹　可児才介　金子和矢　金子寛明　嘉納成男　鎌腰勝　鎌田雅行　鎌田勝　亀田公太郎　柄戸正　川上格　川上恵一　川北喜久　河崎昌之　川嶋栄喜　川澄吉夫　河内武　河西勝　河野博　川辺健次　河村寛二　川本明生　川本政喜　菊嶋秀生　菊地守　北村忠司　木原利幸　木村昭也　許雷　清田太三　久慈次男　國信主馬　久保田聡　熊井直人　栗生明　黒川省二　黒川雅之　黒田和彦　桑形幹　見城美枝子　小泉文之　小泉正巳　小岩正樹　小岩井等　郷正明　河野好伸　鴻池統男　国府谷貴史　小菊健司　國場幸一郎　輿石直幸　小竹義孝　小玉博嗣　後藤伸一　後藤春彦　小橋誠治　小早川敏　小林昌一　小林進治　小林新司　小林紳也　小林善一　小林照雄　小林正春　小林峯子　小松壽　小室憲生　近藤一郎　齋藤圭弘　齋藤繁喜　斎藤武雄　斉藤次弘　榊原信一　阪田誠造　坂本周一　嵯峨山章　佐久間康文　櫻井有紀子　佐々木八郎　佐々木裕志　佐々実　佐藤英治　佐藤滋　佐藤淳也　佐藤立美　佐藤能成　佐野次雄　佐野幸夫　椎名政夫　椎谷清志　塩島亜矢子　重村力
重村正典　静昌平　篠根哲典　篠原正也　柴田克之　澁谷英嗣　渋谷哲生　島本昂治　清水一郎　清水和彦　清水平三郎　志村浩之　下田一太　下田濟二郎　下村憲一　尺田知己　首藤亮一　白井正幸　新保省三　末富健治　須賀和子　菅原保徳　菅原道雄　杉村憲司　椙山健治　鈴木一朗　鈴木清和　鈴木敏彦　鈴木恂　鈴木康史　鈴木裕　鈴木了二　須田鋭一　須永修　鷲見和重　住田悟良　関口悠　関根辰昭　世良耕作　仙石忠重　宗愼治　染谷哲行　反町慶治郎　多賀正夫　高木恒雄　高木聡弥　高草木明　高田英治　高野恭輔　高橋勝彦　高橋淳一　高橋工　高橋徹　高橋泰一　高緑一行　多川勝之　瀧口吉敬　滝本能章　竹内英健　武田勤　田尻哲司　田中一成　田中純子　田中輝明　田中秀樹　田中博隆　田中啓文　田中隆吉　谷口充良　田淵将也　玉村光平　田村正美　丹田天平　知久董　地主道夫　塚田茂　辻ともみ　土屋伸一　土屋博司　都築充雄　堤泰之　坪内幹雄　鶴田日夫　鶴田宣彦　鶴巻稔　寺門征男　照沼聡　富樫亮　土岐昇三　登坂敏晴　戸塚泰宏　戸沼幸市　外岡豊　富川信一郎　富田昌広　巴史朗　朋子ZURCHER　豊川士朗　豊嶋充男　豊田博康　内藤多四郎　中尾誠　中川淳　中川建　中川統夫　中川美代子　中川恭希　中崎丈夫
中里正雄　中澤泰彦　中嶋薫　長島孝一　中島秀則　永田敬子　仲田順一　中田幸男　長塚弘　中西隆之　中西靖直　中根淳　中野順哉　中野知之　長野恒　永橋進　仲摩和雄　中村勝　中村光彦　中村谷百則　中山卓　中山好子　名古路おりめ　名村英紀　奈良豊　成兼一雄　西豊彦　西澤嘉和　西村富夫　根岸英子　根津浩一郎　野口哲　野口久　野口正博　野尻武彦　野々瀬恵司　野原文男　野間道生　野町隆三　野村裕司　野呂幸一　橋本喬　橋本忠篤　長谷見雄二　長谷山勝美　畑聰一　畑稔行　波多野進　花倉敏秋　花堂直和　花本尚樹　馬場璋造　馬場信美　浜田明彦　早川八郎　林昭男　林賢語　林幸雄　原至誠　原田善榮　バローチ満知　樋口久吾　人見亨　日吉義勝　平木和男　平倉章二　平野誠　平野真　平野正男　平山武志　蛭川哲夫　廣兼周一　廣嶋裕晃　廣田裕介　福士勝夫　福田順一　福田忠助　福田裕　福田陽一　福永知義　福永喜朋　福西達　藤岡達也　藤谷光弘　藤津則雄　藤野隆至　藤原みどり　藤原令三　藤村正　藤本健　藤森通弘　古田敏雄　古谷誠章　保科義和　細川博史　細野晟史　細見聡　堀川洌　堀越喜与志　本多圭司　前川昌三　前田信昭　牧村功　増井勇　増井真也　増本寛　間瀬惇平　松井章一郎
松浦晋　松尾武　松岡一雄　松下克也　松下雅宏　松永巖　松永純雄　松原知三　松本真樹　松本洋一　松山美奈夫　馬淵喜全　丸田信重　丸山昭夫　丸山茂生　丸山透　丸山浩　三浦利勝　三沢亮一　三島辰雄　溝口清　溝端利美　溝部廣道　三橋千悟　三富利雄　箕原真　宮川明　宮川清　三宅博史　宮崎昌二　宮崎浩　宮本忠長　向井隆晃　武藤和幸　武藤清　村井潔　村上博智　村田圭介　村林喜貞　村松映一　室橋正太郎　望月敬生　望月英昭　盛勝昭　森欣武　守英雄　森保太郎　森口武男　森園安男　森田裕介　森田芳憲　森永由美　森山正和　両角光男　保浦克佳　柳沢國男　柳澤芳夫　矢部明良　山岡嘉彌　八巻昭　山口洵　山崎隆盛　山崎淳　山田伸典　山田守　山田宗克　山田陽一郎　山中皓博　山中知彦　山中康廣　山村泰三　山本晃郎　山本明彦　山本靖一郎　遊佐謙太郎　横河鉄弥　横沢国夫　横田考俊　横溝貢　横山孝治　好川忠延　吉柴幸夫　吉田紀子　吉田陽一　吉田六左ェ門　依田定和　若松孝旺　和田勉　和田全正　渡辺明　渡邊章亙　渡邊和子　渡辺幸太郎　渡辺務　渡辺直治　渡邊齊　渡辺仁史　渡辺浩文　渡辺芳明　渡辺吉行　渡部泰一　割田正雄

第1回吉阪隆正賞授賞式・記念シンポジウム

第1回吉阪隆正賞授賞式および記念シンポジウムが2011年5月13日、西早稲田キャンパスにおいて開催された。

記念すべき第1回の受賞者は、田中泯氏。ダンサーである氏は、山梨県上芦沢の集落で廃屋を借り、独力で修復しながら農業と舞踏を中心とした生活の場「桃花村」をつくる活動を1998年より継続している。

暖かな春の夕刻、会場は大勢の参加者で熱気を帯びていた。始めに田中氏に賞状と記念品が贈呈され、審査委員長の内藤廣氏（苗S49）より、「ダンスという身体表現から『桃花村』という開かれた共同体の生成に至る総合的な営みを吉阪賞に相応しい卓越したデザイン行為と考えた。人の尊厳と場所がどう契りを結ぶかについて深く考えるきっかけを与えられた」と受賞理由が述べられた。

次に、田中氏のスピーチでは、幼少期に盆踊りが好きだったことから始まり、西洋舞踏を極めるための海外留学、そして西洋舞踏に疑問を感じ、独自の身体表現の追及と桃花村という場をつくるに至る経緯が話された。会場の学生からの積極的な質問にも田中氏は丁寧に応えていた。

記念シンポジウムでは、審査員一人一人から「吉阪隆正賞」を現代に創設する意味や審査の過程で考えたことなどについて熱を帯びた議論が交わされた。それぞれの審査員が語る吉阪像はすべて異なり、議論は収束しなかったが、一つの価値観では決してとらえられない、ということこそが吉阪の特質であることを示していた。

「吉阪隆正賞」とは何か。会場を後にし、熱冷めやらぬ頭で考えた。

生前、吉阪は学生に課題を与えても決して自分から答えは示さなかったという。答えのない問いかけは、学生の中で響き続け一生の糧になる。

もしかしたら、「吉阪隆正」という人物自体が、吉阪の残した最大の答えなき問いではなかったか。「吉阪隆正賞」とは、その無限の可能性を秘めた問いを僕ら自身へと投げかける場所なのかもしれない。帰り道に夜空の月を見上げてふとそう思った。

丸山傑（広報委員会／苗H19・院H21）

上右：第1回吉阪隆正賞を受賞した田中泯氏
上左：田中氏に送られた記念品。吉阪自邸の壁に掛けられていた漢詩を刻んだガラス（内藤廣氏デザイン）　下：第1回吉阪隆正賞記念シンポジウムの様子